

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：38001

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00813

研究課題名（和文）非言語的情報による異文化間ミス・コミュニケーション

研究課題名（英文）Nonverbal Information as a Source of Intercultural Miscommunication

研究代表者

李 イニッド（Lee, Enid）

沖縄国際大学・総合文化学部・教授

研究者番号：50454997

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000 円

研究成果の概要（和文）：対人コミュニケーションには言語的側面と非言語的側面があるが、学校教育における言語偏重、非言語軽視の傾向が長い間続いているため、非言語的能力の育成に対して一般的に関心が薄く、日常生活における非言語の役割とその重要性が十分に理解されていない。しかし、様々な事柄のグローバル化が進む現在、非言語能力を含む異文化間コミュニケーション能力の向上が益々重要になっている。本研究ではマルチモーダルなコミュニケーションアプローチの観点から、非言語記号の解読に焦点を当て、日本人と外国人の比較をすることによって、異文化間コミュニケーションに対する理解を更に深めながら外国語教育やマルチリンガル教育への示唆を提供した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は非言語記号の解読に焦点を当て、母語話者と非母語話者を比較することによって両者の共通点と相違点を明らかにするとともに、外国語・マルチリンガル教育への示唆を提供することを目的とした。調査した結果は、今後の研究だけではなく非言語コミュニケーション能力の育成にも役立つと考えられることから、本研究の意義は大きいと考える。

研究成果の概要（英文）：Although human communication can be verbal or nonverbal, school systems tend to overlook nonverbal communication (NVC) and focus solely on verbal communication. As a result, there is a general lack of understanding of the significant role NVC plays in our lives and little interest in the cultivation of nonverbal competence. As the world becomes increasingly interconnected and integrated because of globalization in various fields, intercultural communicative competence including the ability to accurately encode and decode nonverbal cues is vital to building positive relationships and preventing conflicts. This study attempted to explore the similarities and differences between native and nonnative users in decoding nonverbal cues. Data were collected from L2 learners and native users of Japanese using multiple methods. The findings provide valuable insights into intercultural communication and implications for foreign language teaching and multilingual education.

研究分野：非言語コミュニケーション

キーワード：非言語 コミュニケーション ミス・コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

対人コミュニケーションとは、人間同士が言語または非言語による意思疎通を通じて互いに心の意味を生じさせるプロセスである。非言語コミュニケーションは、話しことばと書きことばを除いた周辺言語すなわち音声的な特徴や身体各部の動き、接触、空間、服装などの非言語記号によることであり、その重要性は多くの学者や研究者たちに指摘されている。一方、学校教育における「言語偏重、非言語軽視」の傾向が長い間続いているため、非言語コミュニケーション能力の育成に対して一般的に関心が薄く、日常生活における非言語の役割とその重要性が十分に理解されていない。しかし、様々な事柄のグローバル化が進む現在、非言語的能力を含む異文化間コミュニケーション能力の向上が益々重要になっている。異なる文化の人々とコミュニケーションをとるときには、同一文化に属する者同士の母国語でのコミュニケーションに比べ、非言語コミュニケーションへの依頼度が更に高まる。非言語記号は送り手と受け手が属している社会や国での規範と経験で記号化・解読されるため、互いに共通の認識がなければ正しく解読することが難しく、ミスコミュニケーションや摩擦が生まれやすい。

2. 研究の目的

本研究ではマルチモーダルなコミュニケーションアプローチの観点から、非言語記号の解読に焦点を当て、日本人と外国人の比較をすることによって、異文化間コミュニケーションに対する理解を更に深めながら外国語教育やマルチリンガル教育への示唆を提供することを目的とした。

本研究の意義は、国際社会の融和と多文化共存の理想を実現するための非言語を含む異文化間コミュニケーション能力を高めることにある。グローバル化が加速度的に進む今日、個人だけではなく、国家レベルでも異文化圏の人々と交流し、助け合わなければならない。外国人とのコミュニケーションの取り方について、特に広い視野に立った理解や言動が必要になってくる。異なる文化の相手との人間関係をうまく作り上げるため、必要な感情や、親しみ、尊敬の気持ちなどをやりとりする上で非言語は大きな役割を果たしており、異文化間コミュニケーション能力養成の重要な一環である。

3. 研究の方法

本研究では、CMC (Computer-mediated communication) ディスコースにおける非言語記号の発語内効力とコミュニケーション機能並びに母語使用者と非母語使用者の非言語記号の解読の違いについて調査した。特に両者の CMC ディスコースに含まれる省略記号から派生する語用論的推論に焦点を当てた。省略記号(・・・)が同時性および非同時性 CMC に広く使用されているが、記号としての明確な形態や意味、文法的機能などを持たないため、見過ごされたり、誤解されたりすることがしばしばある。以上のことを踏まえて、本研究では省略記号の理解における母語使用者と非母語使用者の類似点と相違点について考察し、ミスコミュニケーションを起こす要因として省略記号を使用するリスクを指摘した。本研究で使用したデータは、同僚間で交換された電子メール(日本語)102件及びそのうちの30件から抽出された省略記号を含む発話文に関する自由回答形式アンケートの回答である。回答者(計42名)には発話文ごとに以下の質問(質問1-3)について自由に記述してもらい、母語使用者と非母語使用者の回答を質的および量的に比較した。

質問1 (Comprehension): 送り手は「・・・」をどのような意味で使ったと考えられますか。

質問2 (Paraphrase): 「・・・」の代わりに、どのような言葉で表現できると思いますか。

質問3 (Metapragmatic awareness): それぞれどんな発話行為をしていると見るができますか。

4. 研究成果

収集したデータを分析した結果、以下の点が明らかになった。

(1) CMC ディスコースにおける省略記号は、ほかのメディアにおけるものと異なって、発話の間または発話末に見られるが、発話の冒頭または単独で使われることはない。

(2) 省略記号は発信者の意図的沈黙を示す以外には、文脈によって与えられる意味が異なるため、多くの機能を果たすことができる。

(3) 省略記号の使用目的は消極的ポライトネスも積極的ポライトネスも伝えることができ、「自己志向」(イントラパーソナル)と「他者志向」(インターパーソナル)の二重性がある。しかし、省略記号の解釈は受信者によって大きく異なることがある。

(4) すべての質問に対して、母語使用者と比べて非母語使用者から Nonresponse (「無回答」、「わからない」) がかなり多かった。(表1)

表 1 *Mean percentages of nonresponse items to Questions 1-3*

	L2 group	L1 group
Question 1	31.9 ±4.43	4.2 ±2.44*
Question 2	32.3 ±6.37	4.9 ±2.93**
Question 3	28.5 ±5.35	6.7±2.69**

Note. Data represent *M (%) ±SD*

*significant at $p < 0.001$

**significant at $p < 0.01$

(5) 回答率に基づいて、発話文 1 – 30 における「・・・」の難易度を 6 つの段階に分けることができた。(表 2、表 3)

表 2 *Percentages represented by Levels of Difficulty*

Level	L2 group (%)	L1 group (%)
6	100	17.1
5	71.4	14.3
4	42.8	11.4
3	28.5	8.5
2	14.3	2.9-5.7
1	0	0

表 3 *Perceived level of difficulty based on mean percentage of nonresponses to Question 1*

Level		L2 group	L1 group
	Most difficult		
6		#23	#28
5		#9, #13, #14, #21	#25
4		#12, #18, #22, #24, #25, #28	#29
3		#2, #11, #15, #17, #20, #27, #29	#11, #14, #20, #30
2		#1, #3, #5, #6, #8, #10, #26, #30	#3, #5, #6, #7, #8, #10, #13, #15, #17, #24, #27
1	Least difficult	#4, #7, #16, #19	#1, #2, #4, #9, #12, #16, #18, #19, #21, #22, #23, #26

(6) 母語使用者も非母語使用者も「・・・」の代用として、フィラーを含むさまざまなパラフレーズ（言い換え）を産出することができたが、非母語使用者に比べて母語使用者のほうが沈黙として解釈したり、送り手の気持ちや身体動作まで想像したりする傾向が強い。

(7) 質問 1 と質問 3 に対する回答には、母語使用者の回答も非母語使用者の回答も多種多様だが、前者の類似性が高く、後者のばらつきが大きい。(図 1)

また、各発話文に対して最も頻度の高い解釈に関しても、両グループの違いが多い。(図2)

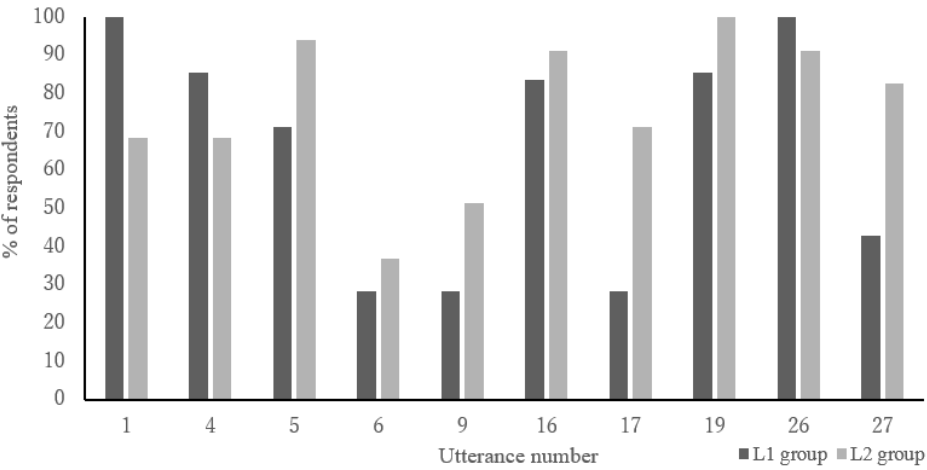


図1 Comparison of percentage of respondents for the most frequently identified speech act type/communicative intent for ten utterances.

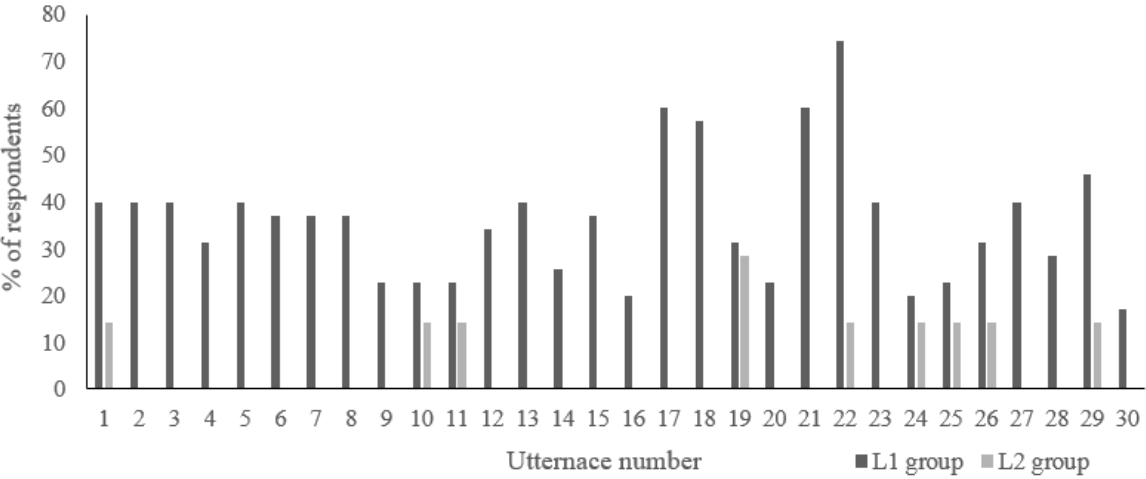


図2 Comparison of percentage of respondents for the most frequently inferred meanings of the dots.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Enid Lee	4. 巻 25(2)
2. 論文標題 Making sense of the dots in computer-mediated discourse: To what extent do L1 and L2 recipients differ?	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 沖縄国際大学外国語研究	6. 最初と最後の頁 37-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 李イニッド	4. 巻 24
2. 論文標題 CMCディスコースにおけるミスコミュニケーションの原因としての省略記号	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 沖縄国際大学外国語研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Enid Lee
2. 発表標題 Making sense of the dots in computer-mediated discourse: To what extent do L1 and L2 recipients differ?
3. 学会等名 3. The 22nd Annual International Conference of the Japan Society for Language Sciences (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Enid Lee
2. 発表標題 The Ellipsis in Japanese E-discourse: A Source of Misunderstanding and Miscommunication
3. 学会等名 The 2019 Taipei Tech International Conference on Applied Linguistics (APLX 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Enid Lee
2. 発表標題 Decoding the dots in computer-mediated discourse: To what extent do L1 and L2 readers differ?
3. 学会等名 Hawaii International Conference on English Language and Literature Studies (HICELLS 2020) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------